

館ノ内館跡発掘調査 現地説明会資料

令和5年11月23日（木：祝） 午後1時30分～

はじめに

館ノ内館跡は、福島おおぞらインター工業団地第二期造成工事に伴い、令和5年8月より調査を実施しています。

大笹生地区は福島市の北西部に位置しており、本遺跡の北に縄文時代の遺跡である「羽根通A・B遺跡」、本遺跡の東側に、中世の在家（農業経営体）と考えられる「伏ノ内遺跡」などが存在し、昔から人が住んでいたことがわかっています。本遺跡は、明治22年に作成された地籍図にも地割の跡をとどめる館跡であり、今回の調査では、館跡の堀跡のほか、水田耕作に伴う溝跡など規模の大きな遺構が見つかりました。



館ノ内館跡周辺の遺跡（Googlemapより転載。一部加工）

調査の成果

①遺構について

1) 堀跡

館ノ内館跡を区画する堀跡です。今回の調査では、館跡西側の南北方向の水路と北西及び南西のコーナー部分が確認されました。堀の南北の長さは84m、堀跡の上幅は7m強、深さは80cm程、底面は平坦で、緩やかに傾斜しています。底面の植物遺体層から水堀、もしくは非常に緩やかに水が流れていたと考えられます。

2) 1号溝跡（SD01）

堀跡の西側で確認された大規模な溝跡です。南から南西角へ流れる溝、南西角やや北寄り、西から流れる溝が合流します。堆積状況から堀跡同様に水が流れていましたが、流れはもっと早かったようです。堀幅や深さに、堀跡のような規格性がないため、水田耕作に伴う水路跡と考えられ、大きく二時期に分かれます。

3) 2号溝跡（SD02）

1号溝跡の南側で確認された、幅1m程度の南北に流れる溝跡です。重複関係から、1号溝跡よりも古いことがわかりました。調査区外に延びており、全体像は不明ですが、やはり水路と考えられます。

4) 3号溝跡（SD03）

調査区北側で確認された幅80～120cmの東西方向に延びる溝跡です。堀跡・1号溝跡との重複関係や、底面付近から須恵器の甕の破片が出土したことなどから、本遺構が一番古く、中世以前の水路と考えられます。

5) 4号溝跡（SD04）

堀跡に付属する土橋状遺構の上で確認された、一番新しい遺構です。水路もしくは暗渠と考えられます。

6) 5号溝跡（SD05）

3号溝跡の南側で確認した溝跡です。堀跡との重複から、本遺構が古いことがわかりました。西側への延びが確認されないため、現水路に合流すると考えられます。遺物の出土がなく、時期については不明です。

7) 6号溝跡（SD06）

調査区北西部で確認した東西方向の溝跡です。確認面からの深さが非常に浅く、途中で消えてしまいました。堆積土は3号溝跡と似ており、古い溝跡と考えられますが、遺物・重複もなく、規模・時期ともに不明です。

8) 土橋状遺構

堀跡中央やや北よりで確認された橋です。下部は、堀跡の堆積土である植物遺体層と青灰色の層の上に作られ、堀跡が役目を終えた後に、堀跡の西と東の通行がしやすいように造られたものと考えられます。

②その他の遺構

土坑1基・ピット7基を確認しました。風倒木痕も数基存在し、そのうちの一つを半截したところ、縄文土器が1片出土しました。本遺跡の北にある羽根山（塩竈神社鎮座）の南西麓には縄文時代後期の住居跡・柱穴・埋甕が見つかった羽根通A遺跡、南南東側には中畑遺跡（縄文時代中期）があり、本遺跡付近で何らかの活動をしていたと考えられます。ピットは、7基が確認されましたが時期・性格については残念ながら不明です。

③調査から見る堀跡の年代について

堀跡の時期を示すような遺物がなく、具体的な年代は不明です。堀の堆積土上層からは、17世紀中頃～18世紀頃の遺物が出土していることから、江戸後期には埋まっていたと考えられます。また、①堀幅に比べて深さが浅く、②掘形が直線的で、③コーナーが直角に曲がるなど、館跡の構築技術としては新しい要素が強いと考えられます。このことから、古くても中世末期頃（天正～慶長年間：1573～1615年）に作られたと考えられます。

④出土遺物について

今回出土した遺物は、土師器・須恵器・陶磁器類・木製品です。陶磁器類は、遺構の堆積土上層や、遺構を検出面より上層から出土しています。出土陶磁器は国内産の碗類がほとんどで、その中で、岸窯（飯坂町）産の陶器片や、肥前（佐賀県）の碗が出土し、17世紀中頃～18世紀代の江戸前期～後期の陶磁器が多く見つかりました。肥前の碗は18世紀頃のものと考えられます。なお、令和3年度実施の試掘調査では在地産中世陶器（下の写真⑥）も1点出土しています。館跡の築城年代については今後慎重に検討を進める必要があります。



まとめ

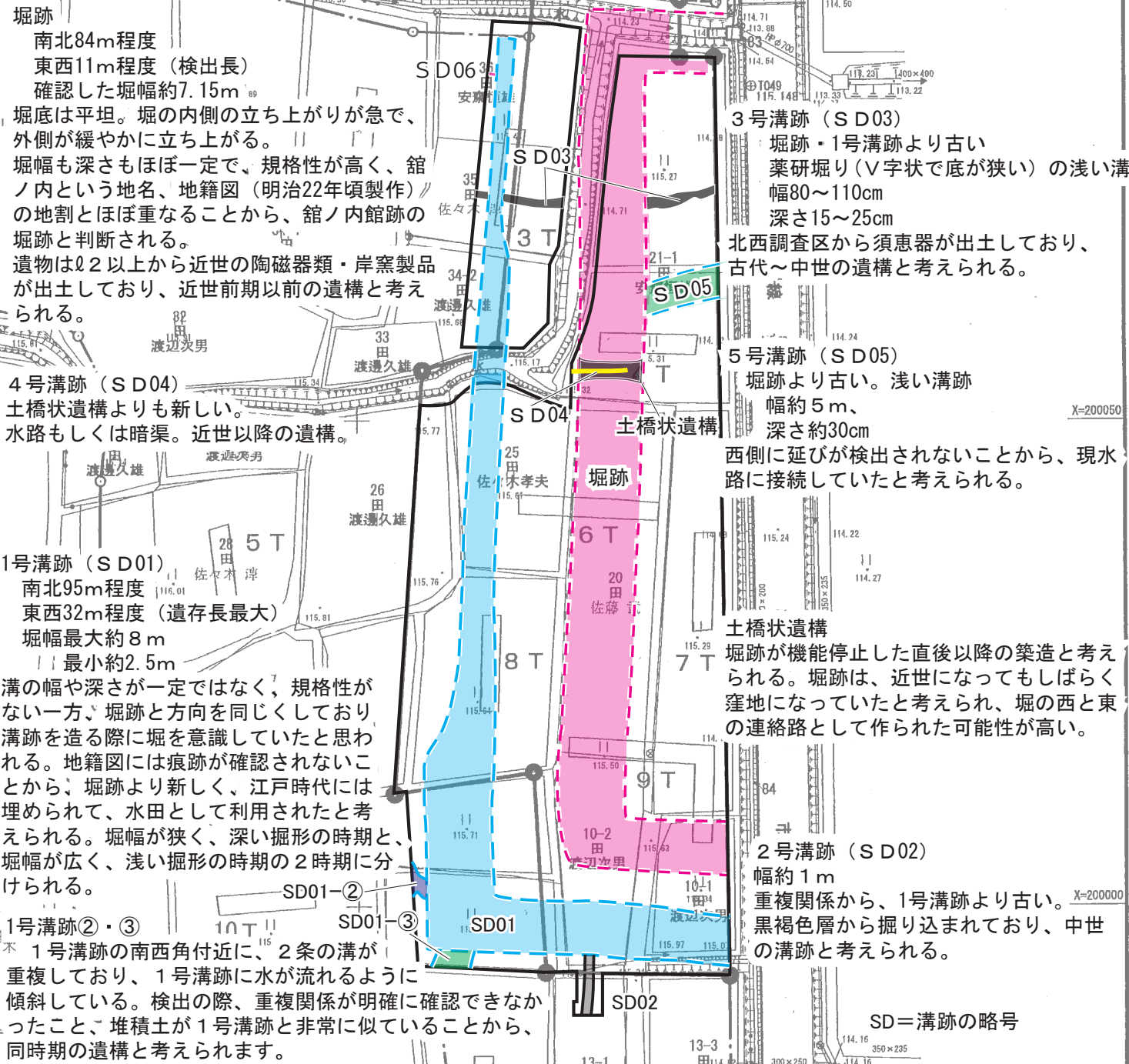
①江戸時代以降の遺物が大半でしたが、いずれも遺構外、あるいは堀跡や1号溝跡等の上層の堆積土からの出土でした。遺物出土状況から、堀跡の下層の堆積土は、江戸時代中期よりも前の段階で埋まっていたと考えられます。このことから、堀跡は中世（末期ごろ）に機能していたと考えられます。

②1号溝跡は、堀跡の形状を意識して造られた、当地域の水田開発に伴う水路であったと考えられます。時期については不明ですが、用途（水路）や規模・形状・出土遺物の状況や、地籍図に痕跡が認められないことから推察すると、堀跡を埋めた後～江戸時代の範囲内ではないかと考えています。また、3号溝跡は底面付近から須恵器の甕の破片が出土しており、中世以前に機能していたと考えられます。

③今後、調査成果をもとに、各資料等を充分にあたりながら、さらに検討を進めていきたいと思います。

館ノ内館跡遺構配置略測図

S=1/500 (A3)



文献資料から見る館ノ内館跡の検討

地籍図に残る館ノ内館跡は、単郭方形で、北西角等に横矢掛りのような地割が見え、堀の内側に遺構がないことから土塁を構築した可能性も考えられますが、堀の深さからそれほど高く積み上げたとは考えられず、防御性はあまり感じられません。館跡の規模・形状から、上岡館跡(東湯野)や、宮代館(宮代)に似た印象を受け、戦国末期の様相を呈しており、天正~慶長期(1573~1615年)の館跡ではないかと推測されます。

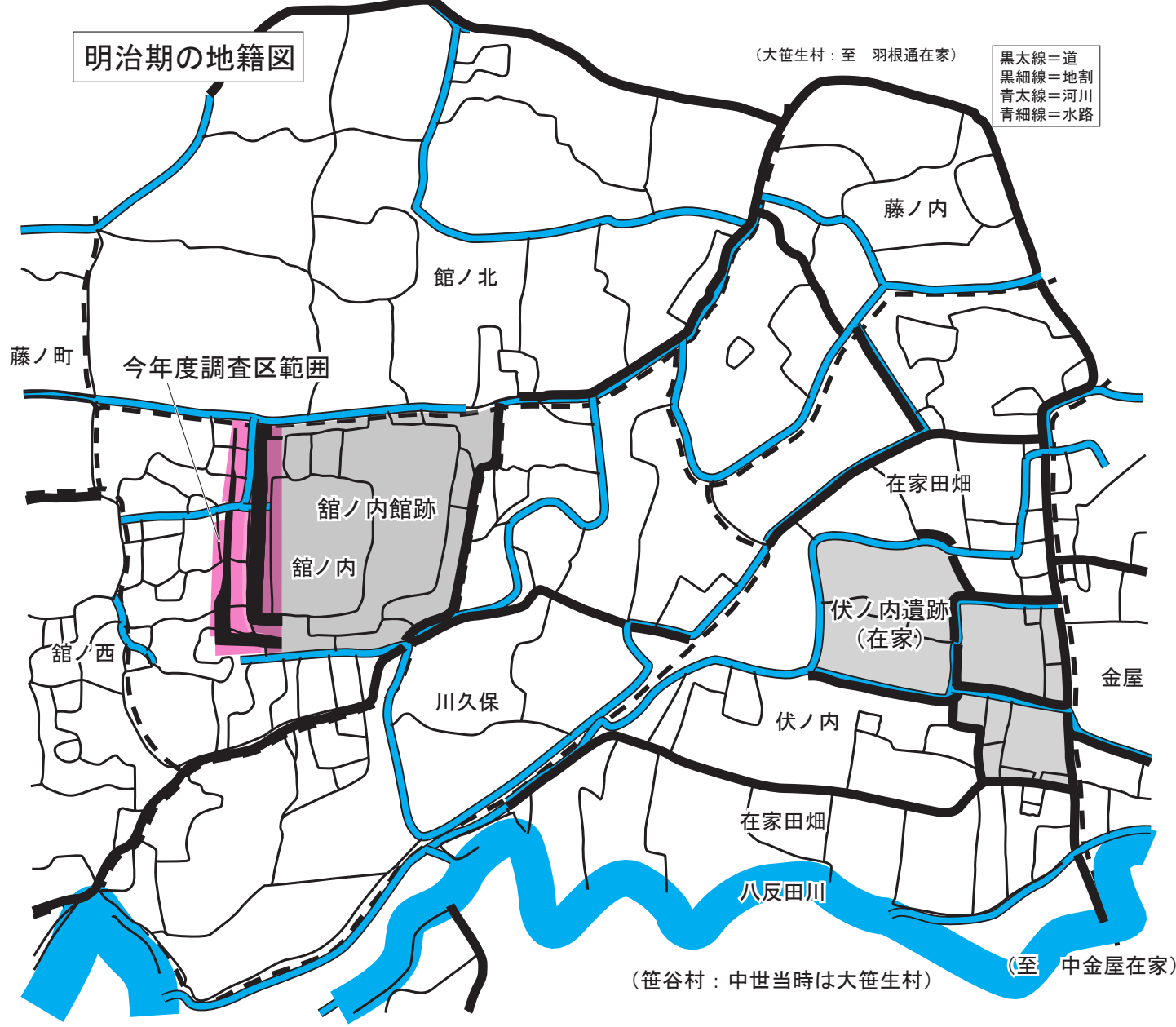
一方、館ノ内館跡周辺には、伏ノ内遺跡、羽根通A・B遺跡、中金屋遺跡や、2km程西側の山麓には大笹生城跡が所在しています。大笹生城跡には、伊達氏の分家筋である瀬上氏が居城していたことが、瀬上家譜や信達二郡村誌から判明しており、伏ノ内・羽根通・中金屋の3つの在家も瀬上氏の所領として知行されていたことが、天文22年(1553年)の「伊達晴宗采地下賜録」からわかります(下記参照)。16世紀中頃における在家の存在や、堀跡よりも古い溝跡があることから、伊達氏の時代にも館跡の基となる素地(立地・用水路等)があった可能性は考えられます。天正19年(1591年)に伊達家は岩出山(宮城県大崎市)に国替えとなり、信夫郡は蒲生・上杉領になります。江戸時代、米沢藩30万石の領主となった上杉氏は、積極的に領地内(信夫郡含む)で開墾を奨励するとともに、用水整備にも力を入れています。上杉氏は寛文4年(1664年)に15万石に減封となり信夫郡は幕領になります。その際の検地では大笹生の石高が前の検地の時よりも大幅に増えており、如何に上杉氏が開発に力を入れていたかが伺えます。もしかすると、堀跡や1号溝跡は、その際の開発の跡なのかもしれません。

参考資料(伊達晴宗采地下賜録:抜粋)
しのふ(信夫)の庄大きさそふ(大笹生)に、一ふしのうち(伏ノ内)に、一はねとし(羽根通)さいけ(在家)、一なかかなや(中金屋)、をのをの遣置所也。

確認された遺構



1号堀跡堆積土状況 1号溝跡堆積土状況 土橋状遺構と4号溝跡



字川久保

試掘トレンチ位置